

2018  
おもろ  
チャレンジ

ドイツ・ミュンヘンで森の魅力を追究し、  
日本に生かす！

農学部 2年

田畑 舞織

ドイツ

2018年7月31日-

2018年8月24日



## 渡航概要と内容

### 1. 目的

- (ア) 現地の人と交流しながら、ドイツの森や木の魅力を自分自身で体験し検証する
- (イ) 将来にわたって、森林や木の魅力を伝え、森を愛する仲間を増やすための方法を研究する

### 2. 背景

私は、誰もが生きがいを持てる社会の実現に貢献したいという思いを抱いています。大学で森林科学を学び始めてから、森林が人々に癒しや生の実感をもたらしてくれるという点に着目するようになりました。また衰退の一途をたどるイメージの日本林業再興への力にもなりたいと考えていました。そんな中、ドイツでは人々が森を愛し楽しむ、理想的な関係が築かれていると書籍で知り、実体験をもとに豊かな日本の森を生かした活動のヒントを探るため、渡航を決意いたしました。

### 3. 活動内容

#### (ア) ヒアリング調査

現地での様子を見ながら当初の計画を一部変更し、3つの質問に絞って街なかの森林公園で一般の方々36名にヒアリングを行いました。目標としていた100名には遠く及ばず反省点は多かったものの、森林に対する姿勢への傾向をつかむことはできました。

#### ①森林のどんな点に魅力を感じますか。

多くの人が静けさや新鮮な空気を挙げられました。この質問を通じて自分にも問いを投げか

け続けることで、私自身は森林に差し込む光に惹かれていることに気づきました。

②森林とビジネスから連想することは何ですか。

私が知らないビジネスを聞けると期待して尋ねましたが、日本と同様に木材の利用や公園という答えがほとんどでした。また、森はみんなのものであるからビジネスとしての利用には反対である、ビジネスは森林を破壊するといった否定的な意見もいくつかいただきました。

③人々が森林に魅了されるためにおすすめの森林での過ごし方は何ですか。

私が知らない活動が出てくると期待して尋ねた質問ですが、多くの人の答えはいたってシンプルでハイキングやウォーキングがおすすめとのことでした。

以上のヒアリングから、人々の生活や文化に根ざした森林の存在を感じとることができました。

### (イ) 森林のプロとの対談



写真：左上から右下にかけて Ms. Angela Weinfurtnner, Ms. Immich Gisela, Ms. Claudia Barthmann, 安井暁世様, Mr. Thomas Michler, Mr. Michael MöBngang, Ms. Michaela Amann, Ms. Katharina Brändlein

(以下、文章は時系列順)

京都大学教授の方々のサポートのおかげで、つながりが全くない状況から目標の3名を上回る8名のもとを訪ね、お話を伺うことができました。

- ・ 現地在住でドイツの森林や文化に明るい日本人の方：安井暁世様のご厚意で、物理的にも心理的にも森が近く日常的なレクリエーション空間となったフライブルクの町と森をご案内いただきました。

- ・ National Park Bavarian Forest の森林教育の専門家：Mr. Thomas Michler に国立公園の施設の紹介、興味分野の質問をさせていただくとともに、地元の経験豊富なボランティアガイドである Ms. Claudia Barthmann からお話を伺いながらハイキングをいたしました。

- ・ Ludwig-Maximilians-University Munich で医学の観点から森林医学や自然療法などを研究されている教授：Ms. Immich Gisela のオフィスに伺い、日本との関係も含めた医療と森林の関係に

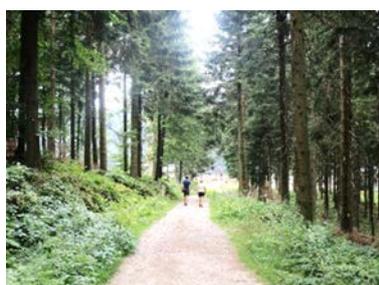
ついて多くの情報を提供していただきました。

・森林浴プログラムの第一人者：Ms. Angela Weinfurter が主催されている、ドイツで始まったばかりの森林浴プログラムを2度体験させていただきました。

・森林管理と企業向けビジネスをされている方：Ms. Katharina Brändlein とお会いし、ビジネスにおけるマインドを教わるとともに、森林管理の現場に同行させていただきました。

・バイエルン森林・林業局で Grafrath を拠点として森林教育や広報に携わっている方：Ms. Michaela Amann と Mr. Michael Mößnang から都市の子どもたちが失いつつある自然とふれあう機会を提供し、印象的で幅広い視点から自然の魅力を伝える方法を学びました。

#### (ウ) 体験・現地視察



・森林：約8kmの道のりをハイキングするなど、できるだけ現地の方と近い森との関わりを体験しました。国立公園に指定された森林では自然のありのままの姿が残されていた一方、楽しむための工夫が施された森では、小さな遊具で森林の興味をかきたてたり健康増進に役立つ設備があったりと、調べていたことが確認できました。



・ミュージアム：子どもが遊びを通して学びつつ、大人でも楽しめるワクワクするような展示の仕方を学びました。ドイツ語の壁は感じましたが、展示内容についても木の部位の説明や木の実をテーマにするなど、発見が多かったように思います。



・木材の活用方法：町で見かけるものから、市場や専門店の木製品など、豊富な木の利用方法を観察してきました。また一般の住宅に滞在する機会もあり、日常の中にとけこんだ木との暮らしも体験しました。その結果、新たな木材活用方法のアイデアを得ることができました。

#### 4. 渡航中に日本との文化の違い等から苦労したこと

特に苦労したことは思い当たりません。苦労ではないですが、シャワーを浴びる際には節水をいつも以上に心がけました。共通点もありましたし、違いを発見すれば面白いという心持ちで過ごしていました。

#### 5. 渡航中に起こったトラブルとその対処方法

特に大きなトラブルはなかったです。交通機関について、一度だけ遅延の影響で予定していた電車に乗り遅れましたが、すぐに対応のメールが届き解決できました。交通網が発達した国や地域では、事前にアプリなどをインストールしておくとう便利です。また、切符を買う際は1日乗車券など安い値段で提供されているものを選ぶよう、調べておくことをおすすめします。

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

### ● 感謝

おもろチャレンジでは私一人では到底できなかったことを、多くの方の支えのもとに実現することができました。一人で渡航はしましたが、常に誰かに支えられている感覚があったため、独りに感じることはありませんでした。渡航前のアポイントメントの相談や渡航先での活動についてアドバイスをくださった方々、渡航中に快くお会いくださった方々、私の挑戦を応援してくださった方々とたくさんの方が思い出されます。また、現地でも重いスーツケースの移動をしている私にさりげなく手を差し伸べてくださったり、ヒアリング調査をきっかけに日本に興味をもってくださったりと、一つ一つの貴重な出会いを本当にありがたく思っています。感謝の気持ちを原動力に、帰国後も次のステップへと邁進します。

- 感動

おもろチャレンジの目的に掲げたのは、森林の魅力を自身で体験すること。そして、魅力を発信し、次につなげるためのヒントを得ることです。ドイツでは、できる限り地元の方と近い方法で森林を楽しみ、町や森を歩き続けては素敵なアイデアを発見し、感動する毎日でした。また書籍から学んでいた通り、森林が文化として根づいていることも体感し感動を覚えました。この感動を伝えていくには、帰国後の今からが勝負だと考えております。

- 感化

書きつくせないほどのたくさんの出来事がありましたが、特に印象に残っているのが人との出会いです。心から尊敬できる人との出会いは私にとって宝です。彼らの教えを胸に今後の活動に生かしていきます。

例えば、森林の魅力を伝えるには、実際にポジティブな体験をしてもらうことと、考える機会をもってもらうことが重要というアドバイスを Mr. Thomas Michler と Ms. Claudia Barthmann からいただきました。日本でもより多くの方にそれぞれにあった方法で森林を楽しみ、考えをもっといただけるよう、工夫していきたいです。

## ■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

- 在学中の挑戦

- Black Forest Academy との共同プロジェクトの立ち上げ：宿泊先でお世話になった方から、大学と提携を結び、経年的に大学生が一週間ほど滞在し、黒い森地域で研修をするプロジェクトを提案していただきました。ぜひこの計画を実現させて近い将来、再びドイツへ渡りたいと考えております。
- 学問分野の追究：来年5月にギリシャで開催される World Conference on Forests for Public Health への参加に挑戦、日本の森林浴研究で第一人者の方とのコンタクト、論文や書籍などを通じて、さらに学びを深めていく予定です。
- 日本や世界各地の森林訪問：様々な森林地域を訪問し、文化にふれながら経験を積んでいきたいです。
- 小さなビジネス：インターネットを活用し、実践を通して活動資金を得ながらビジネスを学びます。
- 情報発信：SNS などのプラットフォームを活用する予定です。

- 長期的な展望

- 森林をテーマにした施設の運営：森で感じられる幸せや生きがいはみんなのもの、という認識のもとに誰もが楽しめる施設を立ち上げ、運営したいという夢を持っております。
- 自らの生き方や暮らし方の選択：今回の旅でお会いした方々から、考え方や生き方、暮らし方について大きな影響を受けました。今後の選択において、この経験が反映されると思っております。

- 挑戦を支援できる人：私自身も力をつけお世話になった方々へ直接恩返しするのはもちろんのこと、さらなる挑戦を応援できる人になりたいです。

## ■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

- 興味を伝えてみる：所属する団体や授業でお世話になっている先生など、身近な方に相談してみると可能性が大きく広がりました。相手に伝える過程で自分の考えを整理することもできますし、思わぬ機会を紹介していただけることもあります。
- 早期から準備する：完璧な準備はできませんが、事前に行きたい場所や会いたい人を決めておくとスムーズに計画が進みます。紹介を繰り返していただくと連絡にも時間がかかるため、余裕をもって準備に取りかかるとよいと思います。
- 機会をつかみきる：おもしろチャレンジは意欲と熱意があれば、誰にでもチャンスがあります。私自身、身の丈から大きく背伸びしたチャレンジだと心得つつも、楽しみながら遂行することができました。少しでもやりたいという気持ちがあれば、素直に向き合って行動に移されてはどうでしょうか。

みなさんの挑戦を心より応援しております。

## ■ 主な奨学金の使途

\*宿泊費

\*渡航費

\*現地交通費

\*現地調査費（主に施設入場料）

\*海外旅行保険 など